

教 仏 名 聞

第71号
(発行日)
2016年8月1日
発行所：真宗大谷派念佛寺
〒6638113 西宮市
甲子園口2丁目7-20
電話・FAX (0798)
63-4488
(発行人) 土井紀明
mail:bachkantata2mubansou@zeus.eonet.ne.jp
http://www.eonet.ne.jp/~souan/

《 聞法会ご案内 》
○ 〈同朋の会〉
毎月22日 午後2時始。
○ 〈念仏座談会〉
毎月2日と12日 午後3時始
○ 〈聖典学習会〉
毎月6日 午後7時始。
○ 〈真宗入門講座〉
毎月18日 午後6時30分始。
* 8月は2日の念仏座談会と6日の聖典学習会以外は休み。

死の縁は仏にあう縁

先日、真宗人だけの会合がありました。一人一人が挨拶される中で、ある八十才を過ぎた高齢のご門徒の方が、「真宗のお話しを聞いていますが、私は死んでどうなるのかという問題のお話よりも、これからこの世をどう生きていけば良いのかというお話しを聞きたい」とおっしゃいました。実はこういう話は決して珍しい話ではなくて、ときどき聞きます。「死んでどうなるのかよりもこれからどう生きるか。それを聞きたい」という問い。これが若い方からの問いならまだしも、もう八十才を過ぎたご門徒さんから聞くと、私はやや落ちつかないものを感じるのです。

もちろん、そのご高齢の方がすでにご信心をいただいでいて、後生の一大事を解決した上での発言でしたら、それは一向に構わないのですが。というの、八十才という年齢を越えているということ、これは、これからどう生きていこうか、これを聞いて、「こうしなさい」

「こういう生き方をしなさい」「ああいう生き方ではダメですよ」などと聞いて、これから果たして今までと違った生き方ができるのかどうか。それは容易ではないと思います。むしろ、今まで生きてきたようにしか生きられないというのが現実であって、これからの自分の生き方を変えることは大変難しいと思うのです。

それとこれも思うのですが、百パーセント確実なのは「死ぬ」ことです。しかも死は決して小さなことではありません。今まで経験しないようなことを経験するのであり、死してどうなるか、それは全く不可解ですから、当然不安があります。またこの世の凡てからの離別でもあります。しかも死は私に対して見えない相手であり、わけのわからないものです。そういう死に対して、それをうつつやっておいていいのだろうかという疑問です。八十才を過ぎているという

ことは、こういう問題が目の前に迫っている。にもかかわらず、その問題に向き合わず、この世をこれから先どう生きていけば良いのかということだけを問題にしようとするのは、私にはどうも落ちつかないのです。

あるいは、「死ぬのは仕方がない。そんなことを考えてもムダだ」と、初めから自らの死に対してあっさり手を引いているのかも知れません。こういう「死ぬのは仕方ない。だから考えない」という決着の付け方をしている場合が案外多いのかも知れません。しかし、そういう考えで落ちつけるかという、おそろしく死への不安や不可解な気味悪さは残るのではないのでしょうか。死に直面することは、不可解な無限に対することなの

であり、そういう相手の見えない死に対して「死の覚悟」はしてみようがありません。「死すべき身であり、もう死はすぐそこにある。私は死んでどうなっていくのか」を問題にして、その死に「どう対応するのか」と正面から向き合う。その問いが仏法(真実)が開かれてくる大きな縁になるのではないのでしょうか。

「まぬがれがたい死」を問題にするとき、南無阿弥陀仏は私に何を告げているのかが明らかになってまいりましょう。そして死を超えていく道をただ今の自分に知らせていただくのであります。しかも、そこに思いもよらぬ有難い大悲のまこと(真実)にであわせていただくのであります。 (了)

《 孟蘭盆会法要 》
八月十日 (水)
午後二時始まり
* 法要の際、法名をご持参下されば仏前に安置させていただきます。
* 八月十二日と八月二十二日の集まりはありません。
* 八月二日(座談会)・八月六日(聖典学習会)はあります。

安楽国土の荘嚴は

(和讃問答)

安楽国土の荘嚴は

釈迦無碍のみことにて
とくともつきじとのべ
たもう

無称仏を帰命せよ

(讃阿弥陀仏偈和讃)

(現代語訳) アミダ如来のお浄土である安楽国土(仏・菩薩を含む)のすばらしいありさまは、釈尊のはなはだ勝れて巧みな説法でもって説いても説きつくすことはできないのである、と曇鸞大師は申されている。言葉では説きつくすことのできない尊いアミダ仏をたのみとせよ。

N 「安楽国土とはお浄土のことでしょうが、荘嚴とはどういう意味ですか」
D 「荘嚴とはうるわしく(主体)や国土(環境)をかざるという意味です。ここでは如来法蔵様のご修行によってうるわしく仕上げられたお浄土のことです。お浄土の荘嚴には依報荘嚴と正報荘嚴とがありまして、依報荘嚴とは環境

としてのお浄土の素晴らしいありさまであり、正報荘嚴とはお浄土にまします仏・菩薩のありさまをいいます」

N 「依報であるお浄土のありさまとは」

D 「法蔵菩薩が仕上げられた浄土の尊い相は釈尊によってさまざまに説かれています。ここでは環境的に安楽な世界と説かれています。非常に安らかなさとの領域いわゆる極楽(窮極的に安楽な世界)ですね。また正報とは主体的なものを言いますが、極楽浄土の主体は阿弥陀仏や菩薩方を申します」

N 「(釈迦無碍のみことにてとくともつきじ)とは」

D 「お浄土と仏・菩薩のお徳は、釈尊の自由自在な巧みな説法によって、説いても説いても説き尽くせないほど尊いと、讃えられています」

N 「お浄土が、私には身近に感じられないので困っていますか」

D 「それに関してですが、金子大栄師が、(浄土は、生の依

る処、死の帰する処)と仰せられています。そして(死の帰する処をもつて生の依る処とする、これが浄土教である)と言われています。これは身近に感じさせて下さる有難い表現ですね」

N 「(浄土は死の帰する処)とは」

D 「浄土は私たちが死んで帰らせていただく安らかな領域であると言われるのです」

N 「死んで帰らせていただくとおっしゃいますが、死んだら骨と灰になって終わりにするのはありませんか」

D 「それは人間を物質として見ているからです。心も脳という物質から出た働きであり、脳が死ねば心もなくなって、火葬場に行けば骨と灰となる、という考えです。要するに人間の本質を物質と見る唯物論です」

N 「どうしてもそういう見方になりがちですが」

D 「それは私たちが幼いときから自然科学を中心にした学校教育を受けてきたからです」
N 「自然科学の見方と唯物論とはどういう関係があるのですか」

D 「自然科学が対象としている領域は物質の世界であり、

科学は物質現象における法則性を見いだしそれを応用して技術を開発し、人間生活を便利ならしめようとする学問です。それによって近現代は物質文明が非常に発展しましたので、自然科学の見方が今日では主流になったのです」

N 「自然科学は人間も物質的に見るのですか」

D 「ええ人間の本质を物質と見て、生体を解剖したり分析して、それによって人間とは何かに応えようとしてきました。そしてあげくの果てに精神活動(心)も凡て脳細胞の働きと考えるのです。ですから脳死になれば心の働きもストップし、身も心もその働きを停止して自己全体が終わる、いわば死んだら終わりになるという考えです」

N 「心は物質である脳の活動に過ぎないと見ているのですか」
D 「そうですね。しかし心と脳の関係は古来から難問中の難問で明快な答は一つも出てません。心と脳とは関係があっても心が脳の活動におさまるのかどうかはまったく分からないというのが現状です。実際、一人一人が(私)と意識している自我意識だけでもどこから起こるのか分かりません」

N 「分からない場合はどうすれば良いのですか」
D 「どう考えるかは、めいめいが自分で選択するより外はありません。その中の一つに唯物論があるのですが、仏教はもちろん唯物論ではありません。仏教では、心は脳を超えていて、脳が機能停止になつたからと言って心が無くなるとは言いません。むしろ心は連続していくと言われていきます。もちろん物質現象も連続しているのであつて肉体を焼いたからといって物質がなくなつたのではなく、物質現象が変化しただけです」

N 「大変難しくなってきましたね。とりあえず、心は連続していくというのが仏教の見方であると考えると良いのですか」
D 「厳密に言えばまだまだ言わねばなりません、そう理解して下さっていいと思いません。そしてその心こそ私の当面の当体であり、それを業識とか、無量寿経では(魂神精識)とも説かれています」

N 「魂神精識というのは靈魂のことですか」
D 「世間で言ういわゆる(靈魂)ではありません。世間でいう靈魂は空間的な塊(かた

せん」
N 「分らない場合はどうすれば良いのですか」
D 「どう考えるかは、めいめいが自分で選択するより外はありません。その中の一つに唯物論があるのですが、仏教はもちろん唯物論ではありません。仏教では、心は脳を超えていて、脳が機能停止になつたからと言って心が無くなるとは言いません。むしろ心は連続していくと言われていきます。もちろん物質現象も連続しているのであつて肉体を焼いたからといって物質がなくなつたのではなく、物質現象が変化しただけです」

まり)をイメージしています
が、そういう意味での靈魂は
仏教では否定されています。
空間的なたまりでは無く、
一人の主体としての心を「た
ましい」と言ってもあながち
間違いではないと思います。
さきほどの金子大栄先生は「浄
土はなつかしきたましいの
故郷である」と表現されてい
ます」

N 「浄土は死を縁として帰っ
てゆくふるさとなのです。
ではすべてての人が浄土に帰
れるのでしょうか」

D 「それは、浄土に生まれさ
せると仰せ下さる阿弥陀仏の
誓いを信じた人に言えること
です。その人は帰るべき浄土
を現在の「生のよりどころ」
として信じた人ですから、
浄土を「我が帰る世界である」
と受け入れていきましょう」

N 「信知しない人はどうなる
のでしょうか」

D 「如来浄土を現在の生のよ
りどころとして感じないので
すから、その人は自分の行く
末を浄土に生まれさせていた
だけとは受けとり難いと思
います。これは一人一人の問
題ですから、「私は死してどう
なるのであろうか」と自分が
自分に問うてみたらどうでし

ようか」

N 「では「浄土は、生のより
処」というのは、どういうこ
となのでしょう」

D 「死して帰るべき浄土は、
死んだ先にどこかにあるとい
うような、世界のあるかぎら
れた場所というのではなくて、
浄土の本質は寿命無量・光明
無量ですから、今の私たちの
いる場所にもまします普遍的
なはたらきでありますよ。
その浄土の中に私たちは置か
れていて、その浄土を離れて
は私は存在しえないほどの身
近にして根底的なはたらきで
あり、それが私たちの人生の
揺るがぬよりどころといわれ
るのです」

N 「難しいですね」

D 「現在の浄土という言葉が
分かりにくければ、如来とい
ってもいいでしょう。浄土と
如来は別のお働きではありません。
せん。アミダ如来も浄土も同
じ真実を言いあてられた言葉
です。私のいるところに浄土
ましますということは、今こ
こに如来様が私たちとともに
にましますということですよ」

N 「アミダ仏が私たちとも
にましますと知るとは、今
如来浄土の上にすでに置かれ
ているといえるのです」

D 「ええ、そういえましよう。

如来様が私を撰取し、私をこ
こにあらしめて下さっている
ことを知るので」

N 「如来様が私とともにいて
下さる、その如来浄土が今こ
この私のより処なのですね」

D 「ええ、そうです」

N 「もし私が如来浄土を私の
より処にしなければどうなる
のでしょうか」

D 「おそらく如来様以外のも
の世間のものをよりどころに
するでしょう」

N 「それは何をよりどころに
するのでしょうか」

D 「お金とか健康とか人間関
係とか社会的な権威とか、い
ろいろありますよ」

N 「そういうこの世の良きも
のは私にとって必要なもの
はないでしょうか」

D 「ええ、大事なものです。
人間は一面物質的な身体をも
っていますから、生きるため
にお金も必要です。健康も大
事ですし、他者の援助も大切
です。ただ身体を自己自身と
とらえ、その外に自己無しと
思い込んでいますと、身体を
保全すべくお金や健康に頼り
すぎるとか執着しすぎるとか
寄りかかりすぎるので、それ
が苦しみにもなり、浅ましい
ことにもなり、他者とのあら

その原因にもなり、社会の
乱れにもなっています」

N 「アミダ如来様を知って、
その上でお金や健康を大事に
するのが望ましい姿であって、
アミダ如来様を知らずにお金
や健康や人間関係だけに寄り
かかるのは望ましくありません
方なのですね」

D 「アミダ仏を知る人は足る
を知るでしょう。またアミダ
仏を知る人はたとえお金が乏
しくなり、病気になるまで死
ぬようになっても絶望しない
でしょう。またたとえ一人にな
っても孤独感はないと思いま
す。足るを知りますから、貪
りや怒りは少なくなるでしょ
う。ところがアミダ仏を知ら
ずお金や健康だけが頼りにな
ると、お金や健康に対する貪
りや執着が起りやすく、そ
のため他者との利害で怒り
や憎しみなどが起りやすく
なりましようし、病気で死ぬ
ようになれば絶望的になりか
ねません」

N 「そうするとアミダ如来様
を知ることが根本的に大事な
ことなのですね」

D 「ええ、そうお聞かせてい
ただいています」

N 「浄土の働きを生のより処
とする、ということとは如来を
知ると同じことな

のです」

D 「先ほども申しましたよう
に、寿命無量・光明無量を人
格的主体的に言うアミダ如
来といわれ、場所的領域的に
表現すると浄土といわれるの
ですから、それを一言で言え
ば如来浄土といえましよう。
この如来浄土を知ることが如
来浄土をより処とすることが
なるのです。知るといつても
知識的知性的に知るとい
ではなくて、信知するのであ
り、感知するのです」

N 「この安楽国である浄土の
お徳は、証りを開かれた釈尊
も、言葉で説き尽くせないほ
どの広大なお徳がましますと
いうことなのですね」

D 「ええ、そうです。人間の分
別を超えて無分別智によって
感得される世界が浄土です。
ら、そのお浄土を分別の領域
の言葉で説くことには限界が
あることも表しています」

N 「そしてこのご和讃では最
後にアミダ仏のことを無称仏
といわれています」

D 「釈尊の言葉でも説きつく
すことも讃えつくすこともで
きない尊いアミダ仏のまこと
の仰せに帰順してくれよと聖
人はお勧め下さるのです」

松並松五郎師のことども④

に寒がりになったと言われました。「戦場はそれはそれはヒドイとこや

松並師はときどき太平洋戦争時代の軍隊で
のことを話されました。その一部はご自分で
書きとめられており『松並松五郎念佛語録』
に掲載しています。

軍隊生活について、「国費で海外旅行をさせ
てもろうた」と、笑いながらいろいろ話され
たことがあります。

「中国で、他の兵隊たちは休日になると慰
安婦のいる慰安所に列をなして行ったが、自
分はお寺（日本人が建てた布教所）に行き、
本堂に入らせて貰ってお念仏をしていた。そ
のときの寺の僧はたまたま大阪出身の方で懐
かしくて話が弾んだ」と。

外地での軍隊生活で若者が休日になして
過ぎすか。窮屈で厳しい軍隊生活の中で休
みに慰安所に出かける、こういうことがあの時
代には行われていたことは現在よく知られて
いる。その当時そういう状況の中で、松並師
は、こういう事を浅ましいことだと感じてお
られ、自分はそれよりもお念仏をしたいとお
寺に行つて長時間念仏を称え続けられました。
浅ましいと感じてそういう場所へ行かなかつ
ただけでなく、お念仏を称えるために寺に行
く、これはなかなか出来ることではないです。
称えると言つても二時間も三時間も続けら
れたのです。

中国からニューギニアに配属され、そこ
は九死に一生を得て帰国された。空爆の爆弾
で吹き飛ばされた時に片目を傷め、それ以後
ほとんど片目は見えなくなりました。地獄のよ
うな南方での戦地の生活で体質が変わり非常

つた」と回想されていました。

南洋へ配置された時でありましょうか、松
並師が軍隊生活の中でも始終「ナンマンダブ
・ナンマンダブ」とお念仏を申されるので、

念佛は陰気で隊員の志気が弱まるというの
軍法会議にかけられました。しかし師の念佛
を止めさせることはとてもできそうもないと
判断されたのでしょうか許されたということ
です。それ以後、軍隊の中で本名で呼ばれず
「なむあみだぶつ、これをしろ」などと他の
兵隊たちからナムアマダブツと呼ばれること
が結構あつたそうです。

師の念仏は自分の努力で申しているとい
ようなものではなく、おのずと溢れ出るよう
な自然なお念仏の相続でしたから、それを感
じていた上官たちは「仕方がない」と認めざ
るを得なかつたのではないのでしょうか。

話は変わりますが、松並師は戦後、大阪の
町工場に勤めながら、念仏堂を建て、村の人
たちとお念仏を称えておられました。日曜日
に集まった人たちとともに香炉に線香一本を
立てて燃え尽きるまで念仏を相続し、何か尋
ねられればお念仏のお心をお話しされたよう
です。私も一度、師の晩年それに参加させて
いただいたことがあります。

奈良の片田舎でのそうした生活ですから、
殆ど世の中に知られないままに生涯を送られ
ました。そんな中で真宗僧侶では、真宗高田
派の東見敬師が十年間三重県の四日市から毎
月松並師の処に仏法聴聞に來られました。ま

た真宗安心の大家といわれた本願寺派の加茂
仰順師が尋ねてこられ、松並師に非常に感銘
されたようで、加茂師のご自坊（山口県か）
にも招かれたり、加茂師の説教所（山口市内
か）で法話を依頼されたりしました。また高
田派の村田静照和上のお弟子の桜井鎔俊師（東
京で活躍されたお方）も尋ねてこられたとの
ことでした。

また特筆すべきことは、一九七九年一月十
一日の読売新聞に松並師のことが掲載されま
した。どういう経路で新聞に載るようになつ
たのか分かりません。

そしてあの鈴木大拙先生から松並師に「あ
んたのことを妙好人として書きたいのだが」
と問い合わせがありました。鈴木博士の申し
出に對して、断られたそうです。断られた理
由をお尋ねすると「鈴木大拙さんは禅の人
やろ、お念仏を申している人でない。お念仏
申す人でないと私のことは分からん」とおっ
しゃいました。

「世界の鈴木大拙」に対して「念仏してな
い人に私のことはわからぬ」と言われる、「な
るほど」と感銘したことでした。鈴木大拙先
生は私が大谷大学にいたころ名誉教授だった
ので、二・三回講話をお聞きしました。当時
から雲の上の人で、周りの人たちから崇めら
れたお方でしたので、逆にこの松並師の言葉
は強烈でした。しかし実際そうではないか、
念仏の世界は念仏しないと分からないのが本
当で、お念仏が開く信心の深い世界は外から
は何いしれぬものがあると思います。

これを思いますに、現代は、お念仏を生活
の中で称えることが大変少ない真宗になつて
います。これで果たして、生涯専修念佛の行
者であつた法然聖人・親鸞聖人の深い信心の

領域を本当にその深みにまで理解できるので
あろうかと危惧します。（了）

〈遠方法話予定〉

- * 九月四日。釜石市。寶樹寺。午前十時
 - * 九月十日。福井別院。午前十時法話・午後座談
 - * 九月二十七日。名古屋別院。午前十時法話・午後座談
 - * 十月十三日～十五日。福井別院。朝事後法話と午後法話
 - ・座談。宿泊可（☎〇七七六・二一・四四四四）
 - * 十月十九日。名古屋市中川区。坪井氏宅近くの開法会館
午前十時法話・午後座談
 - * 十月二十三日～二十五日。札幌別院報恩講法話
 - * 十一月二十三日～二十四日。石川県金沢市。名聲寺。
午後から午後迄
 - * 十二月十日から十一日。姫路市。西源寺。夜から午後迄。
 - * 十二月十七日。福井別院。午前十時法話・午後座談
- （詳しくは念佛寺の方にお問い合わせ下さい）

《秋季彼岸会》

九月二十二日（木）

午後二時始まり

* * *

*念佛寺で帰敬式（おかみそり）を御希望
の方はこの秋季彼岸会の法要後に帰敬式の
儀式を執行致します。ご希望の方は申し出
て下さい。

儀式を致しますと仏教徒としての名（法
名）が授与されます。

